

# 東南アジアの遺跡救済に成果

東南アジアの歴史にとって象徴的な存在である世界文化遺産・アンコール(カンボジア)やバガン(ミャンマー)などの大規模遺跡は、劣化による崩壊や災害などの危機にさらされたが、日本を含めた国際協力が功を奏して難局を脱した。文化遺産保存の成功例とも言われるこれらの取り組みを振り返りつつ、将来の保存のあり方を考えるシンポジウムが、東京で相次いで行われた。

(文化部 多可政史)

## 国際協力が奏功

### 工法工夫「バイヨン」修復 生きた文化継承「バガン」

カンボジアの内戦終結(1991年)後の国際協力の一環で1994年に始まった遺跡救済事業。その歩みと最新の成果が報告されたのは、日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JSA)結成25周年記念のシンポジウム(昨年12月開催)だ。

建築、考古学、保存科学などの専門家が集結したJSAの大きな成果として強調されたのが、王都アンコール・トムの仏教寺院「バイヨン」(12世紀後半頃)における修復だ。

バイヨンの基壇は、土をつき固めた基礎を石で覆って造られる。雨水の浸透などで土がもろくなり、基壇の一部にずれが生じるなどの劣化が見られ、経典などを収めたと見られる倉庫「北経蔵」は柱や壁が崩れかかった箇所もあった。

他国のチームの修復では鉄筋コンクリートの使用が常態化していたが、JSA団長の中川武・早稲田大名誉教授は「土と石」による伝統的工法を尊重した。修復箇所も特に破損の激しい部分に限定し、消石灰を混ぜるなど最小限の改良で土の強度を上げる方法を採用。欠落した石の復元もオリジナルに近い材質の石で行われた。

今日、世界遺産登録でも重視される「オーセンティシティ」(真実性)という概念の先駆的な実践だった。バイヨンでは、

他国がコンクリートで修復した箇所を経年劣化が報告されていることから、JSAの先見性は高く評価されている。

このほかシンポジウムでは修復過程のデジタル記録や、雨水による劣化防止のためのモニター監視など、25年間の救済事業における技術革新の報告もあった。近年はバイヨンの本尊仏の修復を目指して精巧なレプリカ複製も行っており、カンボジア文化の精神性を伝えるソフトウェアの貢献も大きい。

### シンポで課題指摘も

今年1月に開催されたメコン川流域諸国の文化遺産の現状を伝えるシンポジウムでは、現地の第一線の研究者も交えた報告が行われた。

11・13世紀のミャンマーの仏教遺跡群「バガン」は仏塔(ストウパー)、寺院など3500以上の大小様々な記念物がある。洪水や地震など数多くの災害に見

舞われたが、地元研究者と海外チームの協力で、貴重な建造物や壁画などの修復にあたった。こうした取り組みが実を結んで昨年、ミャンマーで2か所目の世界文化遺産に登録された。

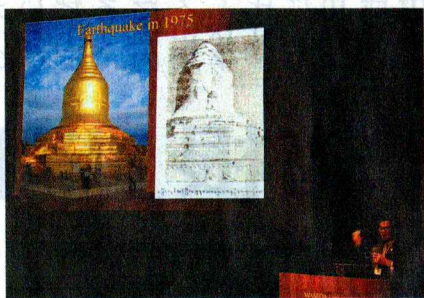
ミャンマー考古・国立博物館のテイン・ルイン副局長は、バガンが今も巡礼や祭りにとって重要な場所であり、「遺跡ではなく、生きている場所なので」と強調した。今も活用される「リビング・ヘリテージ(生きている遺産)」をいかに継承するかという点について、バガンの文化財保護にも関わる東京文化財研究所の友田正彦・文化遺産国際協力センター長は「最新の技術だけでなく、その土地に合った伝統的技術を掘り起こしながら、有形・無形の価値を両立して保存していくことが重要」と強調した。

一方、カンボジアの国立プリア・ヴィヘア機構総裁のコン・プティカさんは、文化遺産保護を担う若手研究者・技術者の人材不足や地域社会の参加という面で、また課題が多いと訴えた。人材難には、経済成長が著しいカンボジアで、観光や建築といった分野に比べ、文化遺産分野での雇用環境が十分整っていないなどの実情があるという。

雇用の問題は12月のシンポジウムでも提起され、海外チームのプロジェクト終了後に働き場が失われる懸念も指摘された。人材育成やその受け皿作りなど息の長い取り組みは、文化遺産保護の裾野の拡大のために今後必要とされるだろう。



バイヨンの修復現場の様子(写真提供・JSA)



バガン遺跡の地震被害の様子などが紹介されたシンポジウム